書　評　　小林隆児　著

「自閉症の発達病理と治療」

（岩崎学術出版社，１９９８）

吉　田　敬　子

（九州大学医学部精神科）

著者小林隆児氏は，自閉症の臨床および研究ひとすじに20年余の期間専念してこられた精神科医師で，今我が国を代表する自閉症の専門家である。また著者は1992年に彼自身が経験した201例の自閉症を長期にわたり治療し経過観察した結果を，Journalof Autism and Developmental Disorders に発表し，世界の自閉症研究者に大きな学問的衝撃を与えた。それ以来国際学会の自閉症のセクションや諸外国の研究論文報告では，自閉症研究の最高峰 Rutter 教授をはじめとして皆が必ず Kobayashi の論文を言及および引用するようになった。こうして Kobayashi の名は国際的に揺るぎないものとなったのである。それらを契機に臨床活動はより一段と飛躍して開花し，従来よりエネルギッシュな著者の活動歴のなかでも現在最も精力的な臨床研究活動を行っている。

本書はこのような軌跡をたどってきた著者の自閉症研究の結晶とも言うべきモノグラフである。書物は誰が書いたものかも大切だが，私個人としてはそこに何が書かれているかの方にずっと重点をおいている。したがって私がある本の書評を依頼された場合は本の内容を出来るだけ紹介することから始めるように努めている。

しかし今回は例外である。本書は小林隆児氏によるモノグラフであることが大変重要であるので，著者の紹介をまず行った。本書は自閉症の臨床および研究にたずさわっている人，これからそれを目指している人はどのような立場であろうと是非一読されるべきである。本書を奨める理由はいくつかある。

１）まず，既に述べたが，本書が著者による200余の自験例についてのモノグラフであることである。それゆえに著者の構想で本書は進み著者の視点が反映されたものとなっている。例えば第１章のはじめから，まず経過観察の結果とも言うべき，追跡調査から得られた自閉症の青年期・成人期の転帰が示されている。ここに臨床家としての著者の姿勢と実績が示されているのである。通常の乳幼児精神医学関係の著者であれば，年齢や発達段階の順を追うため，乳幼児期からはじめるのが常であるが，本書はいきなり予後から始まっている。発達障害児の親は，こどもが将来どのように発達していくのか，健常児のように正常に生活できるのかなどを心配する。私たちの臨床場面では，初診の時から親に質問されることである。著者が数多くの自閉症児と家族に接するなかで親の気持ちや心配を十分にくみ取り，また専門家としても長期予後の重要性を認識しているあらわれである。私は1986年パリで行われた国際児童精神医学会で，ある幼児自閉症の研究者が発表後に，その研究発表の自閉症児の予後について質問されたときに，それは自分の領域外であるので，知らないと答えたことを覚えている。私はその学会参で発表のために来ておられた著者と共に，その発表者の研究者としての態度と臨床家としての態度の差異について話したのを今でもエピソードとして思い出すことを付け加えておく。

２）症例が豊富でテーマに添って紹介されており，それぞれについて著者のまとめやコメントが記されている。また症例を読むと，自閉症児・者が話した内容や行動などが克明に記録されていることがわかる。例えば30歳の男性のケースが紹介

されている。その中で，著者は高い知的水準と言語発達水準に達した自閉症者のスポーツ活動を通して観察された運動技能と社会的技能の特徴を示し，幼児期から顕在化してきた対象関係の病理を中心に考察している。スポーツにもいくつかの種類や難易度があるが，むしろその中での対人接触場面に限って極力回避的態度を取っていることを例示している。自閉症児・者の言語や認知面の発表は他にも多いが，本書で紹介されている職場でのエピソードやスポーツなど生活面の詳細な提示の症例は貴重である。

3）心理検査等の資料やデータが豊富である。特に，自閉症児・者の環境世界に対する知覚の異常については，知覚変容現象という概念を用い，その現象に基づいておこる自閉症の行動や対人関係上の障害について説明をしている。またそれに関連して紹介されている症例については，その現象を顕著に示すデータが示されていて興味深い。

4）最後に著者の最近の学術的な拠点ともなっている，自閉症の情動的コミュニケーションに注目した自閉症の治療論を「自閉症治療論再考—情動と認知の関連性に焦点を当てて」という題で本書で展開している。自閉症研究は，19世紀に Maudsley により，発達過程の偏り，遅れ，歪みを含む幼少児期の精神障害として注目され，1943年に，Kanner が，11人の小児を5年にわたって経過を追い，”fascinating peculiarities”と興味を示し，その特徴に Autistic という用語を使用し，対人関係の障害に病因論的な注目を置いた。しかし1960年代に Rutter は多くの自閉症児は，話しかけても反応がない，または反響言語などの表[illegible]のために対人関係に障害をきたすのであり，自[illegible]症の病因は言語の障害であるとして，認知障害[illegible]一次的であり，対人関係はそれによる二次的な[illegible]害だと論じたのである。それ以来自閉症の病因[illegible]をめぐっておびただしい研究発表がなされてき[illegible]感情認知障害説，心の理論，実行機能障害説な[illegible]が論争されてきた。著者の病因論提唱には次の[illegible]うなステップを踏んでいる。1）著者の多くの[illegible]床自験例から，自閉症の症状を形成している根[illegible]には，情動の障害があると感じてきた。2）そ[illegible]観点からいままでの症例を見直してみた。3）[illegible]閉症の一次的な病因は，言語認知障害ではなく[illegible]言語発達段階以前からの母子関係を含めた情[illegible]ミュニケーションの障害であるという仮説を立[illegible]た。4）この仮説を検証するために，現在母子[illegible]療に取り組み，自閉症の症状の変化を分析し，[illegible]の治療効果について発表を続けている。私が本[illegible]を奨める理由は，著者は，自閉症の臨床家として[illegible]第一人者であるのみではなく，研究者としての[illegible]勢も確かであり，それゆえに国際的な学術世界[illegible]デビューし，研究活動を続けている人であり，[illegible]書にはそれらが充分に反映されているからで[illegible]著者の新しい仮説にもとずく母子治療の効果[illegible]については学術的波紋が広がった。充実した[illegible]論争は刺激になる。母子治療の過程には著者[illegible]定した以外のこともおこり得る。そのため治[illegible]果がどこまで著者の仮説を証明しているかに[illegible]て，効果があらわれなかった症例も含めて検[illegible]期待したい。これらが本書の続編になるで[illegible]